

五十男に翼は生えるか (東 紫朗 空をゆく より)

きらきら光る太陽、紺青の大空に、白銀の積乱雲、夏の盛りだ。コクピットの中は、直射する日光と、締め切った狭い座席のために、流れる汗も拭うことさえ出来ない。

かれこれ一時間も、タッチ・アンド・ゴウの訓練で緊張し放しだった。十四回のうち、教官がOKを出したのは半分もない。滑走路の中心線と機軸とが合わず、そのままダグダグダーと降りたのも何回かある。接地間際の引き起こしが早過ぎて、ドカン！ と1メートルぐらいから失速したのも何回かだった。

FA200は強い機体だ。練習者にはもってこいの機体だ。他の機体だったら、もう毀していたかも知れない。引き起こしが大き過ぎ接地寸前に頭を上げ、パワーが足らず地面にたたきつけられそうになったこともしばしばである。教官がす早くスロットルを入れなければ、ガチャンである。横風を受けながら、ファイナルコースを、グライドするとき、機体を風上に傾けたまま接地する。風上側の車輪が軽く着くと、続いて反対側が、そして一、二秒あとに前輪が接地して直進するのがウマイ着陸だ。だが、そうは行かないのだ。傾けて降りたのはいいが、フットバー(足ペダル)の使い方が悪いから、滑走路を斜めに突走る。アブナイ！ と思って反対側に踏み込むと、グラッと揺れて、イナズマ型に走り出す。滑走路を飛び出したら、誘導灯を蹴散らし、あげくの果てはテンブク、発火は間違いないのだ。その都度、教官はこのカンの悪い五十男に怒りもせず、「センセイ、左を踏み過ぎですネ」と慌てもせずに修正してくれる。命がけで教えている筈なのになんとヤサシイことよ！ 教官が練習生をセンセイと呼ぶこの奇妙さ！ 暑いのと冷汗とゴチャゴチャになりながら、五十男に翼が生えるかの問いに答えるべく、真摯敢闘の姿だ。だが楽しい！ こんな楽しいことってあるものか！ うまく機体を操れたときの喜び、充実感、生命感ともいうべきものが身体じゅうを走る。オレはまだ若いんだ。そのへんの五十男とワケが違うのだという喜びが、また練習に励みをつける。しかし、今日は何たるザマだ。オレには適性がないかも知れない。やめるのは男らしくないし、第一あんなにヤサシク教えてくれる教官に申し訳ない。少々クサッた気持でタクシーウェイ(誘導路)を走る。

エプロン(機体置場)へ着いて、エンジンを切ろうとしたら教官が、

「そのまま！ もういいでしょう！ ひとりで上がって見たら？」

「え？ ソロですか!? ウーン」

「大丈夫ですよ、うまく降りれなかったら、何べんでもゴーアラウンド(やり直し)しなさい。そのうち、降りれますヨ！」

そういいながら、サッサとシートベルトを外し降りにかかる。

「ソウデスカ！ ヤリマス！ その前に水を一パイ。暑くてやり切れんですヨ」

地上で待っていたクラブ員が気をきかせて、空港ビルへ水を取りに走った。

「サア、一パイ」

と差し出された水をグーイと飲む。生き返ったようだ。

「じゃ、しつかり！」

と手を振るみんなに、ちょっと挙手をして、コクピットを閉める。閉めると、とたんに落ちついた。

「教わったとおりにやればインダロ。ソーダヨ。教ワツタオリニヤルンダ」

と自分にいい聞かせる。マイクを手にとって、

「フクイタワー、スリーファイブ オー ファイブ (注=愛機の番号3505)リクエスト タキシ  
ー ツウ テイクオフ オーバー」

とやると、

「スリー ファイブ オー ファイブ ランウェイ ワンエイト QNHトリゼロゼロナイナ  
ー ウインドワンセブンゼロ シックスナット」

と返って来る。

「ツリーファイブオーファイブ イッファストソロフライト プリーズ ヘルプ ミイ サンキュー  
ー」

パワーを入れて、ブレーキテストをする。誘導路を規定の速さで走る。オレひとりで！ という  
気持が、妙にワクワクする。怖い感じがなくもないが、それよりも、なすべきことが多過ぎて、テ  
キパキやっているという感情はあまり入って来ない。ランウェイ(滑走路)の前で停止して、  
左右を確認し、滑走路に入る。出発線で滑走路の中心線に機軸を合わせ、エンジンの点検をする。  
マグネットチェック、キャブヒートチェック、ミクスチャーチェック、轟然たる爆音の中、小刻み  
に震える機体の中で、正確に順序正しくチェックする。

「スリーファイブオーファイブ、レディツウテイクオフ オーバー」

と報告すると、タワーから、

「クリアーテイクオフ」

と指令が来る。

ブレーキを外し、スロットルレバーを、始めは徐々に、しまいには急速に入れる。機体が一段と  
吠え出して走り始める。

何も考えない一瞬の間、機体がわずかに左右にヨーイングする。足で修正する。舵を押える。  
機体が直進する。軸線が合っている。ヨシ！ スピードメーターがズーと上がる。六十マイルを越  
した！ 七十マイルに近づく！ 少し舵を手前に引く！ほんの少しだ。手に感ずる地面の振

動がなくなった！ と同時にファツと浮く。左に傾く機体を、右フットバーを軽く押して修正する。高度計が上がり出す。一〇〇、二〇〇、三〇〇、その間にうしろを振り返り、滑走路の中心線から外れていないかを確認する。高度計が四〇〇を指す。少し機体を右に傾け、十五度バンクで右旋回に移る。コンパスが二七〇度に近くなる。

オーライ、オンコース！

軽くロールアウトして、右斜め下方の滑走路をチラッと見る。機は教官の体重分だけ軽いので、いつもよりずっと上昇率がよい。真青な空の中へ馳け昇っていくうち、思わずバンザイ!! と子供のように叫んだ。七〇〇フィートでレベルオフ(水平飛行になること)して、ダウンウインド(場周経路の一部)に入る。

「フクイタワー スリーファイブオーファイブ オン ダウンウインド リクエスト ランディング インストラクション オーバ」

すぐ福井空港タワーから返事が来る。

「スリーファイブ オーファイブ、クリアーランド、ランヌエイ ワンエイト QNH……………」

高度七〇〇フィートをメンテインして、第三旋回に入る。パワーを絞る、フラップ一段降ろす。機速を九十マイルにしたことをメーターで確かめて、進路九十度にする。右前下方の滑走路を見つめながら、間合をとる。ココトコロが大切なトコロだ。高度、速度、進入角のどれが違ってもうまく行かないのだ。滑走路延長線へ近づく。バンクをとる。滑走路に正対する。軸線を合わせる。フラップを二段下ろす。グライドパスをバシスに合わせる。スピードを七十五マイルにメンテインする。ココガムツカシイトコロダ！ 機は少しずつパワーを絞るので沈下して行く。滑走路がだんだん近づいて来る。近づくにつれて急速に大きく近づく。エンドだ！ エンジンカット！ 滑走路の端で五十フィートぐらい。うまくすべって行く。機が沈む。舵を引く。また沈む。また引く。

もう着くかなと思うころ、ドカンダダ……と接地した。ヤッタ！ どうとうヤッタ！ たった十分間のファイト、ソロ・フライト！ でも僕にとっては生涯の夢だったのだ。五十男に翼は生えそうだ！ 飛行機の行足を軽くブレーキで押えながら、あまりうまくないランディングだったなあと余裕が出て来た。エプロンに入ると、みんなが寄って来てくれる。誘導されるまで、機体を進めて、エンジンを停止する。キャノピーを開くと、オメデトウ、オメデトウの顔、顔である。教官がこともなげに、

「大丈夫だったでしょう」

とってくれる……。

去年八月十三日のことである。あれから一年、訓練を始めて二年八カ月、航空工学、航法、通信、気象学、法規の五科目の学科に五十男の記憶力の限界を、しみじみ味いつつ、実地では失速回復操

作、スローフライト、パイロン（一点を中心に高度、速度を変えず正しい円を描きながら飛行する）など、苦しい中にも楽しい訓練を続けた。

かくて今年の八月四日、航空局の試験官による自家用操縦士のテストを受け、ライセンスを獲得し、ここに、ニワトリパイロットは誕生し、五十男に翼は生えたのだ。



セスナ177 JA3401 での河合先生 右席は多分トットさん